

論文要旨

「おんなのこ」として性風俗世界に生きる

—ある東京の無店舗型 SM クラブを通して見た都市的“性”様式に関する研究—

熊田陽子

本論は、東京都市部の SM クラブ（以下「X 店」と呼ぶ）で実施した参与観察調査の成果に基づき、適法的な性風俗世界に関わる女性性労働者、すなわち「おんなのこ」の生の分析を通じて、東京という都市空間の細部から見えるものを軸に、都市で人々が行う生の実践の特質—本論での「都市的“性”様式”—を明らかにすることを目的とする。X 店には様々な立場の人が関わっており、みな広く社会とのつながりを維持しながら X 店を訪れる。東京圏には違法なものもあるが、X 店は公安委員会への届出が受理された適法的な性風俗店として成立しており、その意味では法的な空間でもある。これは X 店が、現代日本の公的領域—すなわち、政治・経済・文化（この場合には、日常の文化でもあり、日常を創り出す法制度の文化でもある）—に包摂・接合された存在であることも意味する。そこで本論では、従来性風俗産業に対して付与されがちであった「違法」「裏（社会）」といった表象を避け、社会に埋め込まれた存在として捉えるために、X 店を含む適法的性風俗産業とそれが持つ社会とのつながりを、包括的に「性風俗世界」として理解する。また、巨大な市場規模を持つ性風俗世界が、性の側面で現代日本の都市的生活様式にも浸潤しこれを形成する重要な要素となっていると仮定して、都市における生の形成に与する性のあり方を指して「都市的“性”様式」と呼んで問題化する。

初期シカゴ社会学や都市人類学の立場から蓄積されてきた研究の批判的精読からは、都市に、人々の生を規定するような作用、すなわち都市的生活様式としての構造化が確認される。しかし同時に、生は、完全に構造化されつくすわけではない。都市に生きる人々、とりわけ境界を生きる人々は、構造化を受けながらも逆に都市を利用してしたたかに生きる。本論ではそうした姿を境界で営まれる生から明らかにすることを目指し、中でも、人々の生の根幹にある性に着目して検討を行う。

以上の問題設定において本論が分析の軸に据えるのは、「都市的なる」関係性の実態である。都市で人々は様々な性質の関係を構築するが、中でも都市に特徴的なのは、個人が自分の持つ諸ネットワークを分割し、個々のネットワークでつながる他者に対して別のネットワークの存在を秘匿できるという点にある。本論ではこうしたネットワークの分割と秘匿を可能とする関係を、「都市的なる」関係と定義する。更に「都市的なる」関係では、関係形成の基盤となる「自己」のあり方にも際立った特徴がある。「都市的なる」関係では、自分が持つ諸ネットワークを分離し互いを秘匿しておくことができるため、個人は、切断した「自己」の部分を見せることで、一貫性のある存在であるようかに見せたり、状況に応じた「自己」の（部分的）接合を通じて「自己」を自由に作り上げたりすることができる。そして他者の側は、

自分が知りえるのは相手の部分に過ぎないことを了解しながら、彼／女の総体を掴もうと推論を繰り返す。このような「自己」のあり方を前提に本論では、「都市的なる」関係で行われる実践、すなわち「自己」を単に分断するのではなく、完全に切り離して他者の目から秘匿することを「自己」の「切断の実践」、そして切断された「自己」同士を部分的につないで「自己」を作り上げることを「接合の実践」と呼ぶ。そしてX店で働く4人の「おんなのこ」に焦点を当て、切断と接合の実践を通じて形成する「おんなのこ」としての「自己」の内実と、それが個別の生において持つ意味を検討する。この作業を通じて、「都市的なる」関係の中で、切断と接合の実践を通じて「自己」を形成しながら他者となつたり、性の行為を行うという都市的“性”様式の詳細について探る。

その結果、都市的“性”様式において実践される性は、確かに構造化から自由であることが明らかとなる。X店はSMクラブであるため、ここではプレイの内容が使う道具などによってカテゴリー化されている。しかし、同じカテゴリーに分類されるプレイであっても、そこで実際に何がどのように行われるかは状況によって大きく異なる。またX店では、通念では「性的」と理解されないようなあらゆる事象が「性的」なことに変換されていく。そのため、実践される性の全てを包括的に網羅することは事実上不可能となる。

しかし議論の過程では、都市的“性”様式における関係の作り方、すなわち「都市的なる」関係の中で「自己」の切断と接合の実践を行うことが、「おんなのこ」の間（更には客や店側の人々の間）で、作法として、あるいはより強い規範として存在していることが同時に解明される。つまりX店を通じて見た性風俗世界では、都市的生活様式としての構造化からは自由であるものの、今度は、関係性を規定する別の構造化が作用している。ただし、この後者の構造化もまた、盤石というわけではない。本論では、このような構造化を揺さぶるような契機についても考察を加えつつ、総合的な分析を行う。